

小林奈央子

愛知学院大学教授

(宗教学)

①伊達聖伸著『もうひとつのライシテ—ケベックにおける間文化主義と宗教的なものの行方』岩波書店

②斎藤英喜著『神道・天皇・大嘗祭』人文書院

③森本あんり著『魂の教育—よい本は時を超えて人を動かす』岩波書店

①は、カナダ・ケベック州のライシテをめぐる研究である。ケベックは北米唯一の仏語公用語圏であり、カトリック教会が大きな力をもつ地域である。それが1960年代から始まる「静かな革命」によって、仏語で世俗を意味する「ライシテ」という言葉が次第に広まる。ケベックにおける世俗化は、必ずしもカトリックの衰退という単線的なものではなく、カトリシズムに支えられた仏系カナダ人のエスニック・ナシヨナリズムから、ケベック州の領域に住む多様な市民による世俗的なシヴィック・ナシヨナリズムへの変化を指

し、そこにライシテの思想が定着していったという。間文化主義（インターカルチュラリスム）社会での「もうひとつのライシテ」が明らかにされる。

②は、本年9月に69歳で亡くなった著者による500ページを超える大著である。タイトルからは硬質で難解な内容を想像するが、さまざまな学問分野を越境し多彩な研究を重ねてきた著者らしい、緻密で独自の視点に富む魅力的な内容となっている。近年の大嘗祭を検証しつつ、記紀神話はもちろん、「中世神道」や密教、民俗、近代宗教に至るまで、豊富な知識で説得的に論を展開することのできる稀有な研究者であった。死の直前までこのような大作に取り組まれていたことに、ただ頭が下がる。

③は、学者であり牧師でもある著者が、月刊誌『世界』で連載した「ボナエ・リテラエ—私の読書遍歴」を一書にまとめたものである。「よい読書体験はよい人間形成につながる」と著者は述べ、読者は、著者の人生を、その折々で出会った本の内容とともに理解する。「ファーブル昆虫記」から始まる冒頭で「あんり」という男性としては珍しい名前の由来が紹介され、それが若くして亡くなった母親との繋がりを語る最終節の伏線となっている。静かな感動がある。